

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 182, 2018

## VIEW 展望

「視聴覚の物語叙述」の理論構築に向けて／木下耕介…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3 総務委員会…3

支部・研究会だより 東部支部…4 映像テキスト分析研究会…4

アナログメディア研究会…5-8 アジア映画研究会…9 アニメーション研究会…10

映像心理学研究会…10 ドキュメンタリードラマ研究会…11

映像表現研究会…11 写真研究会…11 映像教育研究会…12 中部支部…13

メディアアート研究会…12 ショートフィルム研究会…12

第44回大会実行委員会よりのメッセージ…14

## FORUM フォーラム

第9回日本学術振興会「育志賞」受賞候補者推薦募集…14

## FROM THE EDITORS

編集後記…14

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第182号」2018年4月1日発行  
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：奥野邦利（委員長）・橋本英治（副委員長）・  
 前川修・李容旭・岡島尚志・板倉史明

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp  
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# 「視聴覚の物語叙述」の理論構築に向けて

木下 耕介

去る 2018 年 3 月 23 日、神戸大学国際文化科学研究推進センター研究プロジェクト「映像メディアにおける注意と情動に関する領域横断的研究」研究会において、物語映画における「語り（あるいは物語叙述 narration）」の理論と、その理論構築において無視できない「語り手」の技法についての研究発表を行った。

この問題系は筆者の長年の考察の対象でもある。というよりもむしろこういった方が正確だろう。デイヴィッド・ボードウェル『フィクション映画の物語叙述』<sup>i</sup> がその嚆矢となった「語り」の理論は、その後の認知主義理論の根幹を形成し、多くの映画理論研究者にとって常に同時代的な影響源であり続けてきたといえるが、そもそもこの認知主義の理論が構想の主幹としたのが、映画の物語叙述過程における行為主体（agency）の問題だったのである。これに応じる形で筆者も、『映像学』第 67 号（2001）掲載の拙稿<sup>ii</sup> でこれに取り組んだほか、2014 年以降にもこの問題系に再帰し、情動や身体概念を組み込みつつ、映像の「人称」や「焦点化」といった術語の再検討という角度から取り組んできた<sup>iii</sup>。したがって今回の発表はいわば、これまでの思考の現時点での再整理ともいえる。

そして今回改めて確認したことは、今後の物語映画理論の構築は、この「語り」の理論の根幹にある図式を前提として為されるだろうということである。行為主体についていえば、「語り」の理論は、所謂古典的なコミュニケーションのモデル、映画に先立って存在し、我々観客に物語を提示し意味を伝達するような種類の「語り手」のモデルを否定している。ボードウェル曰く「我々はこの語り手が、特定の組織的な諸規則と、歴史的諸要素と、見る者の精神的背景とによる生成物であるということの思い起こさねばならない。[...] この種の語り手が語りを生み出しはしない。語りこそが、歴史的な『見ること』の規範に訴えかけて語り手を生み出すのである」<sup>iv</sup>。今回の発表では、今日までの理論研究史がこのような主張を補強する方向に動いてきたことを確認した。

それでは、今後この方向性で期待できる理論展開とはいかなるものだろうか。それはおそらく、今日の新しいメディア環境という地図の中に、物語映画を改めて位置づける種類の理論構築ということになるだろう。

認知主義の研究を取り巻く昨今の状況は、すでにこの方向に動いている。例えば、今日物語映画の登場人物研究の里程標として頻繁に参照されるマレー・スミスの『魅力的な登場人物』<sup>v</sup> は、やはりコンピューター・ゲーム研究の領域でもキャラクター研究の基本的文献の一つとなっているほか、領域横断的な論文集『虚構世界の登場人物—文学、映画およびその他のメディアにおける想像上の存在を理解する』（2010）<sup>vi</sup> にも、スミス自身の補遺が収録されている。

このような越境性はやはり、認知主義の方法論が、物語映画のテクストよりも観客に焦点を当てた理論構築をしてきたことと少なからず関係しているのだろう。上述のスミスのほか、トーベン・グロールドやカール・プランティンガといった研究者も、最近の著述では

情動や身体といった観点からの映画受容理論を展開しているが、それぞれがその他のメディア理論への応用可能性を示唆している。

このような見取り図の中で、改めて「語り手」の問題を見つめ直してみたい。そこに見えるのは、例え「見立て」であるとしても、我々が一世紀以上にわたって「映画では観客に対して物語叙述が行われている」という図式を守ってきた、という事実である。この図式は一見当然のようだが、今日のメディア環境の変化を考慮に入れると、物語映画にごく限定的な特徴であるともいえる。例えば MMORPG のような、映画に似た「物語世界」を持つメディアを考えると、ここでは「プレイヤー」が物語の産出に関わるばかりか、自身のアバターを操作し「演技」を行う「俳優」の側面をも担っている。産業的な観点からいうと、流通の末端にあたる消費者が担う役割と体験の性質が、映画とゲームでは大きく異なるのだ。この事実の根底にあるものは何だろうか。

もし我々の研究がこのような現代のメディア環境の文脈で映画を捉えようとするのであれば、この「物語の状況を真似ている」という特性が持つ意味を再検討する必要があるだろう。換言すれば、新しいメディア環境の中にある参加者（観客、プレイヤー、ユーザー…）が種々のメディア体験の中で何を引き受け、何を差し出すのかについての理論の再構築が可能でもあり必要でもある時期が来ているのだろう。それは、1970 年代には精神分析とイデオロギー批評の方法論で観客の主体性が論じられたが、それとは別の枠組で、もう一度同じ対象を見つめ直すということである。

今や、複数のメディア形態に同時に接している現代の我々の文化的営為を記述するための総合的な枠組みとしての、観客/プレイヤー/ユーザー論の構築が求められる。そのための前段階としては、それら多様なメディアのうち、まずは視聴覚のチャンネルを持ち、物語を内包するメディアの利用に限定した包括的な議論が必要だろう。映画以外の（演劇やコンピューター・ゲームを含む）視聴覚の経路を持つメディアが「物語を語る」とき我々はそこで何をしているのか。それを説明する理論モデルへの到達は、そう遠くないように思われる。

## 註

- i Bordwell, David. *Narration in the Fiction Film*. The University of Wisconsin Press, 1985
- ii 木下耕介「劇映画における語り手の修辞について」『映像学』第 67 号、2001 年、pp. 73-90
- iii 木下耕介「映像の〈人称〉を再考する—FPS, GoPro, ファウンド・フッテージ、そして『湖中の女』—」『群馬県立女子大学紀要』第 36 号、2015 年、pp.19-33、および「パズル・フィルム、焦点化の限界、もう一つの系譜—クリストファー・ノーラン『メメント』を例に—」『群馬県立女子大学紀要』第 38 号、2017 年、pp.65-92
- iv Bordwell, p.62
- v Smith, Murray. *Engaging Characters: Fiction, Emotion, and the Cinema*. Oxford, 1995
- vi Eder, Jens, et al. *Characters in Fictional Worlds: Understanding Imaginary Beings in Literature, Film, and Other Media*. De Gruyter, 2010

（きのした こうすけ／群馬県立女子大学）

## 研究企画委員会

鳥山 正晴

### ●研究企画委員会

2018年3月17日(土) 13:00～14:50 研究企画委員会が開かれました。主に第44回大会の研究・作品発表の予備審査の件について話し合いました。

### ●2018年度研究会活動費助成の公募について

1月1日の前会報でお知らせしましたが、延期となっていた2018年度研究費助成についての公募が決定しましたので、公募いたします。

#### ・研究会活動費助成の公募

2018年度、本学会は映像に関する研究・活動の活性化を図るために、研究会が企画・運営する研究活動に対して研究会活動費助成の公募をします。

有意義と期待される研究活動や、継続的な研究活動を行っている研究会、および新規発足の研究会による研究活動の奨励を目的とし、研究会活動費助成の公募をします。

応募された「研究会活動費助成申請書」については審査委員会による研究・活動計画内容、実施の実現性などについて厳正な審査のうえ、助成対象となる研究・活動計画を決定します。

・応募期間：2018年4月1日～4月30日

・応募資格：各支部に所属する研究会の代表者

・公募内容：研究会が企画・運営する研究会活動費として今年度は一種類の助成金を交付します。今年度は学会予算上の都合で昨年より総額が減少しておりますがご理解のほどよろしくお願いたします。(作品賃借料については会員の作品は含まない)

予算額：¥80,000以内(4件程度) (総額¥320,000程度)

・審査結果の通知：2018年5月中旬

・助成金の交付：審査結果にもとづき助成金額を通知します。原則として年度末に領収書と引き換えに交付します。事情により事前の交付についても柔軟に対応する用意があります(総務扱い)。

・研究会活動の結果の報告書の提出：基本的に年度末3月31日(学会報、大会などでの公表)を予定しておりますが、予算の配布時期によって変更場合があります。

・研究会活動費の運用についての報告：基本的に年度末3月31日(学会報、大会などでの公表)を予定しておりますが、予算の配布時期によって変更場合があります。

\*なお、申請内容に食い違いが生じたものや、実施できなかったものについては、報告と助成金の返還を求める場合があります。

### ◎「研究会活動費助成申請書」について

応募する研究会の代表者は記入票(研究会活動費助成申請書.xls)及び予算案を学会ホームページ(<http://jasias.jp/archives/4095>)よりダウンロードし、必要事項を記入のうえ映像学会事務局・研究企画委員会宛に送ってください。(電子メールの場合の送信先アドレス: [jasias@nihon-u.ac.jp](mailto:jasias@nihon-u.ac.jp))

\*「研究会活動費助成申請書」の記入内容については記入票をご覧ください。

●1月1日発行の会報181号でお知らせしましたが、2018年度の春期の新規(変更を含む)研究会登録申請は、4月30日(月)締め切りになっていますので、新規登録する会員の皆様、よろしくお願いたします。

以上

(とりやま まさはる/研究企画委員長、日本大学芸術学部)

## 総務委員会

奥野 邦利

### 報告と計画について

総務委員会では、第5回委員会が以下のように開催されました。ここでは委員会報告とその後の対応についても併せて報告します。

### 第5回総務委員会

日時：2018年3月17日(土) 13時～14時半

場所：日本大学芸術学部江古田キャンパス 映画学科ミーティングルーム

出席：奥野邦利、岡島尚志、李容旭

※オブザーバー出席 武田潔

議案と討議された内容は以下のとおり。

#### 1) 予算執行状況の確認について

年度末に近づき、収入の部では予定している新入会員がやや少なく、年度末の研究費/運営費の支部還付については、未納会費の入金状況をみて速やかに対応することを確認した。支出の部は概ね予算通りに推移しているため、次年度の予算組ではさらなる改善を図りたい。

#### 2) 第44回大会の準備状況

これについては李容旭実行委員長より、会場及びタイムスケジュールなど運営方針についての報告があった。総務委員会としては、第3通信の発行、発表者への概要集原稿依頼、シンポジウム登壇者、学会HPと大会HPとのリンクなど、今後の運営についても意見交換を行った。

#### 3) 会費滞納会員退会勧告に関する件

一昨年度より3年間会費未納(以前は4年間)の会員の方には、退会勧告を出すことになっており、3月17日の時点で9名の会員がその対象となっている。

#### 4) 第23期役員選挙に関する件

3月3日(土)に第23期役員選挙管理委員会が行われ、奥野邦利会員(総務委員長)が選挙管理委員長に選出された(以下委員：遠藤賢治、木原圭翔、高山隆一、鳥山正晴、野村建太、水由章)。役員選挙規定に従い、大会での承認へ向けて順次作業を進めていくことを確認した。

#### 5) 会報に関する件(発行の頻度と時期)

これについては、前期理事会の総務委員会でも検討されたこととして、年4回発行されている会報(電子版3回、ペーパー版1回)を、年3回が適当ではないかと理事会へ再度提言した。具体的には、4月、7月、10月(ペーパー版)、1月に発行していたものを、掲載情報の少ない7月分を取り止め、5月、9月(ペーパー版)、1月での発行とする方針を理事会へ上程し認められた。今後総会での事業案として提案する予定。

#### 6) 会員名簿について

これまで2年に1度のサイクルで会員名簿を発行していたが、個人情報保護を含めた社会通念及び経済的な合理性などを鑑み、次年度より会員名簿の発行取り止めに理事会へ上程し認められた。

### おわりに

年度末をもって9名の会員の方に退会勧告をお出しする予定ですが、ぜひ会費納付を行っていただき、今後とも会への参加継続をお願いしたいと思います。

また、会報の発行頻度を1号分削減、会員名簿の発行取り止めの方針については、学会HPの運用面でフォローしていく予定であります。これについては、橋本副委員長とも相談しながら改善を図っていきたくと考えています。

最後に、これまで長きに亘って事務局を支えてくださった吉田悦子さんが、3月31日をもって事務局実務担当を卒業されます。正直、言葉では感謝の意を伝えることは難しいです。今後は会員としてお迎えし、研究者として本来の姿でのご活躍をお祈りし、且つ応援できれば幸いです。

(おくのくにとし/総務委員長・日本大学芸術学部)

## 支部・研究会だより

### 東部支部

鳥山正晴

2018年1月～3月の東部支部の研究会活動は、以下のような研究会・イベントが行われました。

#### ●日本映像学会映像テキスト分析研究会

2018年1月20日15時30分～18時 早稲田大学 戸山キャンパス  
ジョン・ハートの受難——『10番街の殺人』の分析を中心に  
早川由真（立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士後期課程）

#### ●アナログメディア研究会 協力事業

日時：1月27日（土）、28日（日） 会場：渋谷 イメージフォーラム  
「! 8 to !!16 [exclamation-8 to exclamation-16]」（8ミリフィルム上映映画）

#### ●アナログメディア研究会 協力事業

「帰巢譚 <映像作家福間良夫没後 10年追悼映像個展> 東京上映会」  
日時 2月3日（土）、4日（日） 国立・木乃久兵衛（キノ・キューペ）

#### ●日本映像学会アジア映画研究会（第2回）開催のお知らせ

日時：2018年2月7日（水）18:00 - 20:00 国際交流基金・御苑前オフィス7階アジアセンター

- ①報告「チラン 森に入る～1970年代タイの学生運動とその映画の表象」四方田犬彦氏（アジア映画研究会会員）30分+討議
- ②発表「徳間康快と中国映画」劉文兵氏（日本映像学会会員）45分+討議

#### ●映画文献資料研究会

日時：2018年2月10日（土）13:00～16:00 東京国立近代美術館フィルムセンター 試写室

テーマ：「轟夕紀子は新劇から何を獲得したか？」

- 第1部：参考上映 『勝利の日まで』（1945年、成瀬巳喜男監督、15分）『人生劇場 第2部 残侠風雲篇』（1926年、佐分利信監督、110分）
- 第2部：研究発表「轟夕紀子は新劇から何を獲得したか？」 発表者：山口博哉氏（映画史家）

#### ●アナログメディア研究会協力事業

「太田曜 16mm 実験映画上映」

日時：2月10日（土）・2月11日（日曜日） TATARABA / タタラバ（品川区北品川）

#### ●日本映像学会映像心理学研究会・アニメーション研究会合同研究発表会

第1部 アニメーション研究会 「アニメの感情の谷」横田正夫

第2部 映像心理学研究会 「造形力に頼らないアニメーション制作実習課題の検討」野村建太会員（日本大学）・野村康治会員（松蔭大学）  
「笑いの力」阿部恒之氏（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

日時：平成30年2月11日 14:00～17:20 日本大学文理学部百周年記念館

#### ●ドキュメンタリードラマ研究会

「ドキュメンタリードラマの最前線 テレビマンユニオン 岸善幸氏を迎えて」

日時 2018年2月18日（日） 13:30-16:50 千葉商科大学

#### ●映像理論研究会・映画文献資料研究会合同研究会のお知らせ

テーマ：「日本の映画理論は研究されるべきなのか？」

発表者：アロン・ジェロー（イエール大学） コメンテーター：村山匡一郎（日本大学）

日時：3月30日（金）19:00-20:30 成城大学

以上

（とりやま まさはる／東部支部担当常任理事、日本大学芸術学部）

東部支部

## 映像テキスト分析研究会

藤井仁子

2017年度第2回（通算第17回）研究発表会を1月20日、早稲田大学で開催いたしました。今回は早川由真会員（立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程）に「ジョン・ハートの受難——『10番街の殺人』の分析を中心に」という表題で発表していただきました。早川会員ご自身による報告原稿を頂戴しましたので以下に掲載いたします。

\*

本発表では、数々の映画作品において命を落としてしまう役を演じてきた俳優ジョン・ハートの身体イメージに着目し、画面上の身体にとって生命とは何かという問題に迫った。まず80年代半ばまでの出演作を分析し、重力と戯れるかのようなその独特の身体性を指摘しつつ、『エイリアン』に表れた呼吸器系の問題への言及を皮切りに、彼の演じてきた役柄における呼吸の主題を浮かびあがらせた。では、画面上の身体にとって呼吸とはなんだろうか。そこで着目したのが、呼吸の音である。そもそもトーキー映画において、画面上の身体は映像（視覚的な身体イメージ）と音（声）に分裂している存在であり、それらを繋ぎとめているのはリップシンクである。ミシェル・シオンによれば、その統合によって声は身体の「死すべき運命」にしたがうことになる。だが、そうした声の身体イメージへの帰属の仕方とは異なり、呼吸音は身体イメージに曖昧にしか帰属せず、身体を「暗示」するだけだ。したがって、呼吸音に着目することで、「死すべき運命」とは異なる画面上の身体の在り方に迫ることができるのではないか。この仮説を検証するため、ハート初期の代表作といえるリチャード・フライシャー監督『10番街の殺人』（1971）に表れている独特の呼吸音の分析をおこなった。

撮影地イギリスの録音技術を駆使した繊細な音声が特徴的な本作には、呼吸の主題が明確に表れている。ガスやロープを用いて女性たちの息を奪ってしまうジョン・クリスティ（リチャード・アッテンボロー）は、その息混じりの喋り方によって、呼吸を自らの身体に強く結びつけた存在として描かれる。一方、被害者ベリル（ジュディ・ギーン）やティモシー・エヴァンズ（ジョン・ハート）のアフレコによる呼吸音は、あくまで身体の「暗示」にとどまるものとして示される。妻の遺体を階下に運ぶシーンでは、息混じりに喋るクリスティに帰属する呼吸音が聞こえるのと同時に、エヴァンズに明確に帰属しない不気味な呼吸音が響いている。どの身体にも帰属しない音として彷徨うこの呼吸音は、「死すべき運命」をもつ有機的な身体を統合しようとする声から逃れていくノイズのようなものである。この分析によって、有機的に統合された画面上の身体からすり抜けてしまうような呼吸音の在り方が明らかになった。

今後の課題として、本作に表れる呼吸音を物語内容とより密接に関連づけ、この映画作品内での意味作用を明らかにすることが挙げられる。参加者の方々からは数々の刺激的かつ有益なコメントをいただき、論文文化にむけてさらに熟考すべき点が明確になった。これをもとに、今回の内容をさらに発展させていきたい。

\*

発表後には20名ほどの参加者のあいだで活発な議論が展開され、『10番街の殺人』というフィルムの特殊性と、言語的に分節化されえない呼吸音の問題の一般性とがともども浮かびあがりました。これが早川会員の今後のご研究にどのように反映されるのか、大いに期待したいと思います。

当研究会は、2018年度も例年どおり少なくとも2回の開催を予定いたしております。発表を希望される会員は、運営担当（木村建哉会員、中村秀之会員、長谷正人会員、藤井）のいずれかまでお届出ください。

以上

（ふじい じんし／映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学部）

# アナログメディア研究会

西村 智弘

2017 年度活動報告と 2018 年度計画

## 活動報告

### 【1. 2017 年度主催企画】

2017 年度アナログメディア研究会の主催企画としては「渡辺哲也作品研究会／フィルム作品の検証」「映像学会第 43 回大会アナログメディア研究会企画 フィルム体験としての映画」「追悼 松本俊夫～映像作家・教育者・理論家としての松本俊夫について語る」「ヒカルオンナーフィルム・エクスペリション」の 4 企画を行った。詳細は以下の通り。

#### ●「渡辺哲也作品研究会／フィルム作品の検証」

日時：2017 年 5 月 13 日 10:00-16:00

会場：阿佐ヶ谷美術専門学校（高円寺）

1970 年代に活躍した実験映画作家、写真家、現代美術作家、の故渡辺哲也作品を研究会はご家族から借り受けた。サウンドアート、現代美術研究者の金子智太郎氏と協力しあって作品の整理、公開を行っている。その為の第一段階として作品の状態を確認した上で試写・作品検証を行った。本企画での検証をもとに、映像学会第 43 回大会（6/4、研究会主催企画）、小田原ビエンナーレ 2017(9/2、研究会協力企画)、日本美術サウンドアーカイヴ（3/25、研究会協力企画）において、渡辺哲也作品のオリジナルフィルム上映を実施した。



16 ミリフィルムの状態の確認作業



音声素材（6 ミリテープ）の確認作業

### 検証作品概要

- ・『コーヒーを飲む』イメージフォーラム配給版 1975 年 /B&W/16min/ 光学録音  
コーヒーを作る動作とともに時報が流れる。
- ・『ウォール シー』1973 年 /B&W/12min40/ マグネ録音  
「なみうつ」ということばの反復（男女）と波が映る。（露出開けが激しく真っ白になる場面も・・・）
- ・『エマルジョン シー』1972 年 /B&W/11min30/ マグネ録音  
海と空の境界線を中心に映像が流れる。最後は波の音だけ残り画面は真っ暗になる。
- ・『ウェーパリング シー』B&W/15min/ マグネ録音  
波の映像と SF のような機械音。ブラウン管やフィルムを再撮したものも多く映る。（フリッカー多し）
- ・『歩く男』B&W/27min/ マグネ録音  
白黒ラッシュ。冒頭のみカラー。
- ・歩いている男（渡辺哲也？）の素材集（？）音声なし  
（A- タイプ）ギャング（B- タイプ）オシッコ（C- タイプ）バクダン、というカット名が入る。
- ・『CROSSING』カラー？ /3min/ マグネ録音  
多重露光によりシーソーに乗った男女が重なり合っている映像。全面ピンク色。

#### ●「日本映像学会第 43 回大会アナログメディア研究会企画 フィルム体験としての映画」

実験映画 16 ミリフィルム 上映

日時：2017 年 6 月 4 日（日）10:00-11:10

会場：神戸大学 B-203 教室

### 上映作品：

- トニー・コンラッド『フリッカー（The Flicker）』（1966）
- 渡辺哲也『コーヒーを飲む』（1975）
- 小池照男『生態系 -5- 微動石』（1988）  
（協力：東京造形大学 伊藤純子 小池照男）

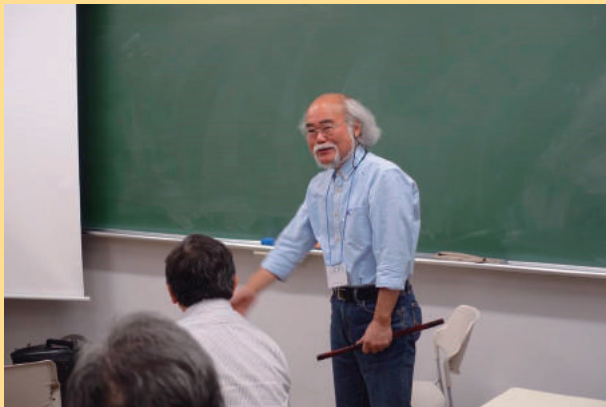
### 企画趣旨

『フリッカー』の斬新さは、単に明滅だけで作品が成立していることにあるのではない。観客がスクリーン上のイメージを観るのではなく、明滅を身体的に体験するものとして提示した点が革新性であったのだ。しかし、フィルムを身体的に体験することは、本来映画に内在した性質であるだろう。なぜなら映画を観ることは、イメージをフィルムの物質性ととも体験することでもあるからだ。（フライヤーより一部を引用）



会場の様子

『生態系 -5- 微動石』（1988）はゲストの小池照男氏自身による笛のライブ演奏を加えた上映を行った。（小池氏は大会会場の神戸大学出身で神戸在住の映画作家）



上映に合わせて笛の演奏を行った小池照明氏

上映後は作家、研究会関係者とのトーク、会場の会員との質疑応答も行われた。

(担当：太田曜)

●「追悼 松本俊夫」～映像作家・教育者・理論家としての松本俊夫について語る

日時：2017年7月16日(日) 14:45-17:30

会場：小金井市公民館 貫井北分館 学習室 A + B

パネラー：伊藤高志 会員（九州産業大学教授／実験映画作家）  
 黒坂圭太氏（武蔵野美術大学教授／アニメーション作家）  
 波多野哲朗 会員（東京造形大学名誉教授／映像研究者）  
 進行：水由章（日本映像学会 アナログメディア研究会）

参考上映：

『アートマン』松本俊夫 16mm 11分 1975

『SPACY』伊藤高志 16mm 10分 1980

『石の詩』（抜粋／デジタル版）松本俊夫 25分 1963

『海の唄』（抜粋／デジタル版）黒坂圭太 30分 1988

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

協力：東京造形大学、ミストラルジャパン、One's Eyes Film

アナログメディア研究会では、2017年4月に逝去された、日本映像学会元会長の松本俊夫氏の追悼企画として、映像作家・教育者・理論家としての松本俊夫の功績や仕事について、参考作品の上映を交えながらシンポジウムを開催した。

この企画は松本俊夫の実験映画が後世の作家にどのような影響を与えたかを研究する目的で、松本氏の実験映画の代表作『石の詩』『アートマン』を取り上げ、松本氏に九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）で指導を受けた伊藤高志会員と、京都芸術短期大学（現東京造形芸術大学）で指導を受けた黒坂圭太氏、1960年代初めから文学研究会や出版、映画評論、などで交流のあった波多野哲朗会員にパネラーとして登壇いただいた。

奇しくもパネラーの三人ともに、松本氏との出会いによって、進むべき道を変更するために職を辞するかたちになったと語るところからシンポジウムはスタートしていった。

作家自らが松本俊夫の映画に多大なる影響を受け、新たな領域の表現形態としてオリジナリティ溢れる作品を生み出したケースとして、松本俊夫『アートマン』に対しての伊藤高志『SPACY』と、松本俊夫『石の詩』からの黒坂圭太『海の唄』という流れがある。

パネラーから『アートマン』と『SPACY』関係性については、時間的

リズムや空間的移動に共通項がある。両作品ともに個人映画という非常にプライベートな作品でありながら非常にパブリック性を感じる。『アートマン』は1970年代、『SPACY』は1980年代という時代を集約している、などの意見が出た。

黒坂氏からは、『石の詩』はドラマ的な世界と土俗的な人間の情念の世界とが密着し、構造的で同時にアニメーションでもある作品だ。その構成力に打ちのめされて、松本俊夫に喧嘩をふっかける意味で『海の唄』を作った。松本氏が自作でも取り入れている、物語（シナリオ）を色と形に置き換えて一本の線状のグラフ化した「グラフコンテ」を作ることの重要性を学んだ。松本氏からは「良いシナリオをグラフ化した時に造形的に美しい」という言葉が忘れられない、などの発言があった。

波多野哲朗会員から『SPACY』『海の唄』の2作品は、松本俊夫作品を別のかたちで変遷をして新たに更新していることが、師を乗り越えている。松本俊夫の遺伝子が受け継がれていることが教育者としての松本俊夫といえるのかもしれない。理論家としての松本俊夫については、「最初の評論集『映像の発見』で、アヴァンギャルドとドキュメンタリーという別の思考の軸を同時に捉えていくことをはっきりと持ち込んだ最初の人であった、などの発言があった。

松本俊夫は、記録映画、劇映画、拡張映画、実験映画、ビデオアート、理論家、教育者など、それぞれの分野で研究されている作家である。今回は実験映画に焦点をあてた企画だったが、松本氏にとって各分野は独立したのではなく交差し、影響し、反発し、そして融合もしている。松本俊夫の活動は常にアヴァンギャルドに富んでいたことを再認識するシンポジウムであった。



伊藤高志会員、波多野哲朗会員、黒坂圭太武蔵野美術大学教授



会場の様子

(シンポジウム報告：水由章／アナログメディア研究会メンバー、ミストラルジャパン)

## ●「ヒカルオンナ-フィルム・エクスペッション-」

会期：2017年10月31日(火)～11月4日(土)

場所：人形町ギャラリー VISIONS

## &lt;企画趣旨&gt;

2015年11月から毎年行われてきた「ヒカルオンナ」上映会ですが、初のギャラリー展示+1日上映会を企画しました。ギャラリー展示では、フィルムメディアに関する絵画、フィルム作品を制作する上での工程を視覚化したものや、映写機を使ったループ上映、フィルム撮影した作品をデジタル化した作品等を扱っていきます。フィルム作品を制作するのに欠かせないカメラやフィルム、現像・製作工程等にも人を惹きつける力があると思います。またデジタルとアナログの融合で表現方法の可能性を実験し視覚で得られる質感を感じ取ってもらえればと思います。今回の展示でスクリーンに投影したフィルムの魅せる世界以外にも、フィルムメディアの魅力を感じてもらいたいと考えています。

## &lt;展示内容&gt;

## 徳永彩加 【鹿児島8mm探訪】



自身が7年間撮りためていた故郷である鹿児島と家族の風景を土地ごとに紹介します。

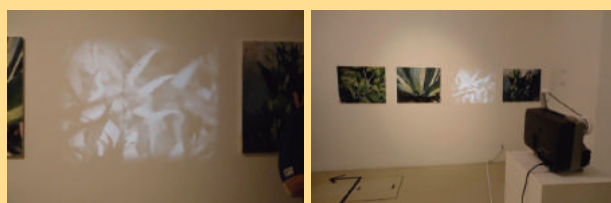
8mmカメラで撮影する事により、ノスタルジックを漂わせることで見た人たちに郷愁を感じさせることが「鹿児島8mm探訪」の狙いです。フィルムを現像しテレシネした後、土地ごとに編集。

デジタルで編集した映像をタブレットの「Kindle Fire HD」にデータ移行し壁にかけてループ再生させました。映写機を日中回し続けることは大変危険です。従って今回のデジタル化してのループ再生は危険性もなく多くの方に見ていただけたので満足しています。

土地ごとに撮影した年、場所、想いを綴った説明文も一緒に壁面に載せていたところ、多くの方に感想を頂きました。異郷の地であるにもかかわらず、「懐かしい」と思わせるのは日本人としての共通感覚なんだろうと思います。

上映会ではデジタルになる前のフィルムも一緒に上映し、質感の違いを感じてもらえたと実感しました。

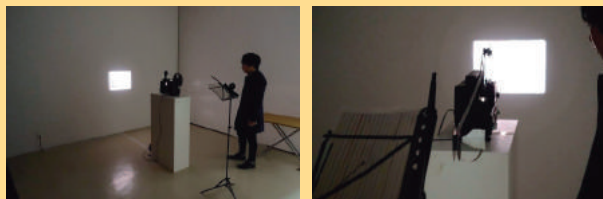
## 早見紗也佳 【水をのんでいく】



3枚のキャンバスに描かれた油彩と、一台の映写機から投影された映像を横一列に壁に並べ展示した。油彩にはそれぞれ植物を描いており、花瓶の植物、鉢植えの植物、土地に植えられた植物を描いている。8ミリ映像は、夜の植物のシルエットを撮影したものを、ループで上映した。絵画専攻に席を置いていたこともあり、映像での制作を始めるようになってから、絵画と映像との関係性に深く関心を抱いていた。フィルムでの映像作りは絵画とどこか似ているとずっと考えていた。漠然とした「似ている」という私自身の気持ちを、体感することのできる展示をと思い制作を始めた。この度の展示では、まず並べて比較してみる。絵画の中に映像で作った絵画もどきを混ぜるとどう見えるのか。非常にシン

ブルだが、今まで、なぜか私が踏み込めなかった、絵画と映像との対峙を形にしたものである。(早見紗也佳)

## 横江れいな 【film update】



「記憶」と「記録メディア」についての映像展示。

iphoneで撮影された映像を8ミリフィルムに変換して作成したフィルムを上映しています。

展示に使用している8ミリフィルムというものは、1970年代に主にホームムービー用に使われた映像メディア。大切な家族の姿を映すプライベートな映像として、人々の特別な想いとともにありました。その後、ビデオやデジタルに圧され8ミリは衰退し、現在ではその特質であったポジフィルムの製造さえしていません。「人の想いとともにある映像メディア」「大切な人をプライベートに映すメディア」その役割を果たしているのは、現在ではスマートフォンなどのデジタルの携帯端末なのではないでしょうか。撮影するメディアは移り変わっても、大切な人の姿をプライベートに残しておきたいという想いと映像メディアのあり方は、今も昔も変わりません。

一方で、「フィルム/スマホ」「アナログ/デジタル」の映像の性質には、物質性や蓄積性、改変性、消去性などあらゆる映像の性質の違いがあることも事実です。現在私たちにとって当たり前のデジタルの映像と、フィルムメディアの映像は、私たちの私的な記憶にどのような変化をもたらしたのでしょうか。メディアの衰退と進化は、知らないうちに私たちの大事なものを変えていないでしょうか。(横江れいな)

## [女性作家たちのフィルム上映会]

日時：2017年11月3日(祝・金) 16:40-18:00

会場：ヒカルオンナ-フィルム・エクスペッション-会場にて

「ヒカルオンナ」上映会は、女性作品だけに着目したフィルム(8mm・16mm)作品の上映会です。現在でもフィルム制作を続けている作家の中、極端に女性作品を見かける事が少なく感じます。そこには女性特有の問題が生じていると考えます。例えば、妊娠・出産・子育てなどでの制作への時間が大幅に削られることや、そういった環境の中での制作への意欲を維持できないなど様々な問題が女性作家を少なくしているのではないかと思います。しかしそんな中でも制作を続ける女性作家は確かに存在します。

フィルム制作への困難な状況の中でも鋭意制作を続ける女性たちの作品を上映し、少しでも関心のある人たちに彼女たちの作品がクローズアップされるよう取り組んでいます。

司会進行：徳永彩加(日本映像学会 アナログメディア研究会)

映写：横江れいな

記録：川口肇(日本映像学会 アナログメディア研究会)

上映作品：

徳永彩加 【鹿児島8ミリ探訪】 single8/3min

早見紗也佳 【おともだち】 super8/3min

横江れいな 【film delete】 8mm パフォーマンス

黄木可也子 【藍にゆく粒の声】 single8 /10min

はら 【色染】 single8/2min

三谷悠華 【うごめき】 super8/3min

白木羽澄 【スラー】 super8/2min

狩野志歩 【揺れる椅子】 16mm/10 min  
 徳永彩加 【玻璃の少女】 16mm/10 min



映写機材



横江れいな氏「film delete」  
パフォーマンス



上映作家トーク (狩野志歩氏)



会場の様子

## 〔展示・上映会を終えて〕

展示期間中は、来場者に「懐かしいね」と声を掛けてもらう場面もありました。若い世代の方からは逆に新鮮だったようで映写機を物珍しそうに見物する方が多く今回のコンセプトのひとつである「フィルムメディアの魅力」を感じてもらえたかな、と思います。

11/3の上映会では場所こそ狭いものの、満席で上映することができました。上映作品はすべて8mm、16mm映写機を使用しオリジナルフィルムでの上映を行いました。その中でも横江れいなさんのフィルムパフォーマンス「film delete」は圧巻でした。映写機にフィルムを掛けたまま薬剤を塗った指でフィルムの乳剤面を溶かし映写される絵が変わっていくというもので、来場者を魅了していました。上映が終わった後は各作家のトークを行い、制作にあたっての経緯など興味深いお話を聞くことができました。

性別が起因して作品性が大幅に変わる事はありませんし、性別関係なく個性が重要になると思います。しかし、人間に生まれた以上2つの性に分かれます。その性差もまた作品を作るうえで面白く感じるのです。女性も男性も根気良くフィルム制作を続けて欲しいと切に願っています。

(報告：徳永彩加／アナログメディア研究会)

## 【2. 2017年度協力企画】

アナログメディア研究会では前項の主催企画に加え、以下の9つの企画に対し協力・参加を行った。

○2017年4月14日  
 「DOG STAR MAN 16ミリフィルムでの上映とトーク」  
 会場：くらしアート 無名庵 ギャラリー (八王子)  
 主催：無名庵 シネクラブ

○2017年5月11日  
 「16mmフィルムでの実験映画上映@スペース煌翔／徳永彩加・川口肇・水由章・狩野志歩 作品集」  
 会場：アートスペース煌翔 (阿佐ヶ谷)  
 主催：阿佐ヶ谷アートストリート

○2017年9月2日  
 「小田原ビエンナーレ 2017 実験映画上映」  
 会場：鴨宮大櫓の居 (小田原)  
 主催：小田原ビエンナーレ実行委員会

○2017年10月7日、21日、28日、11月4日5日  
 「武蔵野はらっぱ祭り 映像インスタレーション&ワークショップ」  
 会場：武蔵野公園 他  
 主催：8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

○2018年1月27日、28日  
 「《8mm/16mm フィルム 新作上映会》!8 to !!16 exclamation-8 to exclamation-16」  
 会場：イメージフォーラム (渋谷)  
 主催：Spice Films・イメージフォーラム

○2018年2月3日、4日  
 「帰巢譚 <映像作家福間良夫没後10年追悼映像個展>東京上映会」  
 会場：2/3 イメージフォーラム3F「寺山修司」(渋谷)  
 2/4 木乃久兵衛/キノ・キュッヘ (国立)  
 主催：帰巢譚東京上映会・イメージフォーラム

○2018年2月10日、11日  
 「太田 曜 16mm 実験映画 上映」  
 会場：TATARABA / タタラバ (北品川)  
 主催：TATARABA / タタラバ・MALTESECROSS VISION

○2018年3月24日、25日  
 「!8 to !! 16 [exclamation-8 to exclamation-16] @京都」  
 会場：Lumen gallery (京都)  
 主催：Spice Films・Lumen gallery

○2018年3月25日 (日)  
 「日本美術サウンドアーカイヴ——渡辺哲也《CLIMAX No.1》1973年」  
 会場：SCOOL (三鷹)  
 主催：金子智太郎・畠中実

## 活動計画

### 【2018年度アナログメディア研究会 活動計画】

●主催企画 5企画 (実施時期含め、全て予定)  
 6月 「奥山順市の仕事について」 研究発表・作品上映  
 10月 「北海道のフィルムメーカー 作品上映と研究発表」  
 12月 「8ミリ・16ミリフィルム現像ワークショップ」  
 2月 「世界の映画フィルムとフィルム機材の現状について」 研究発表と参考上映  
 2月 「実験映画作家としての山崎博 作品上映とトーク」

●協力企画 3企画  
 5月6日 (阿佐ヶ谷アートストリート) 太田曜・宮崎淳作品集 / exclamation-16  
 7月 パーツナルフォーカス東京セレクション (実施時期含め予定)  
 10~11月 はらっぱ祭り 映像インスタレーション&ワークショップ (予定)

以上

(にしむら ともひろ／アナログメディア研究会代表)





## アニメーション研究会

横田 正夫

### 日本映像学会アニメーション研究会報告

2017年度の第1回アニメーション研究会を平成30年2月11日(日曜日)に、日本大学文理学部百周年記念館会議室2にて開催した。映像心理学研究会と同日開催であった。開催時間は2:00～3:00で、発表者は横田正夫会員、テーマは「アニメの感情の谷」であった。当日配布された発表要旨は以下の通りであった。

#### アニメの感情の谷

横田正夫(日本大学)

アニメに描かれる物語では、主人公がある出来事によって激情を誘発され、異世界に行ってしまうたり、無意識に陥ったり、さまざまな心理的な反応が生ずる。例えば、マンガの原作とアニメ化された「進撃の巨人」では、主人公は、巨人と戦う訓練を経て、巨人と戦える過信した時に、巨人と戦うことになり、初戦で巨人に食べられてしまう。この時には「駆逐してやる」という断片的な意識はあるものもとの人間の意識は失われている。つまり感情の谷に落ちている。そしてこの谷から出るためには自らの力では出ることができず、友人が外から声をかけてやる必要があった。感情の谷から抜け出るのは、難しい。このように感情の谷をひとつの図式として当てはめると、物語の構造が分かりやすい。そして感情の谷に落ちること、ならびにそこから出てきたときには感情の谷に落ちる以前よりも人格が高まっていると描くのが、日本でヒットしているアニメの基本構造になっている。

要旨は以上であるが、当日の発表はパワーポイントで参考図を示しながら、感情の谷理論が紹介された。日本のアニメでは、例えば「太陽の王子ホルスの大冒険」の主人公ホルスが、迷いの森に落ちてヒルダの幻覚を見るように、谷に落ちて心理的な混乱を体験する。しかしそこから脱出した時には悪魔と戦うための方略についての悟りを得ていた。このように主人公が感情の谷に落ち込みそのそこで悟りを得て、英雄に変身する様子が、繰り返し描かれてきている例を「進撃の巨人」にも触れながら紹介し、その感情の谷が、大ヒットした「君の名は。」では全編に應用されていることを解説した。

発表後の質疑応答では、フロアからは最近のアニメでは感情の谷に落ち込まないような軽いものが多くあることや大ヒットアニメは時代に合っていたのではといったコメントが寄せられた。

(よこた まさお/アニメーション研究会代表、日本大学文理学部)

## 映像心理学研究会

横田 正夫

### 日本映像学会映像心理学研究会報告

2017年度第1回の映像心理学研究会が、平成30年2月11日(日曜日)、日本大学文理学部百周年記念館会議室2にて開催された。アニメーション研究会との合同で、アニメーション研究会の後の時間、3:10～5:20までが映像心理学研究会に充てられた。研究発表は2つあり、それぞれの発表時間、発表テーマ、発表者、発表要旨は以下のとおりであった。

#### 3:10～4:10

##### 造形力に頼らないアニメーション制作実習課題の検討

野村建太(日本大学)・野村康治(松蔭大学)

アニメーション制作実習課題を行うにあたり、課題対象者の造形力が問題となることがある。将来アニメーターを目指し、デッサンなどの専門教育を受けている場合はその限りではないが、初等中等教育過程の生徒や高等教育過程でも絵を描かない分野の学生に対し、アニメーション制作実習課題を行う場合、造形力の基礎がないことを前提に実習課題を設定する必要がある。将来アニメーターにならない場合でも、アニメーションの動きを理解出来る人材を育成することを目的に、アニメーション制作実習課題の検討を行う。

発表者は日本大学芸術学部映画学科でアニメーションを教えているが、画力にばらつきがある学生を対象としたアニメーション制作の教育、特に動きの制作を習得する初歩として、カットアウト人形を使用した歩きのアニメーション制作課題を課している。学生には、人形の体の部位と関節の数を指定し、人形を制作してもらう。撮影方法やデータ提出方法の規定を提示し、撮影は自宅で行ってもらう。完成した映像は、講評会で見ながら問題点を指摘し、何度か作り直す。毎回の講評会では、自身が制作したアニメーションを自己評価してもらい、各段階に制作された映像は第三者にも評価してもらうことで、データを収集し、実習課題の有効性の調査も行っている。また、その調査を行いながら授業内容のブラッシュアップを行っている。

大学で行っている実習課題の他に、小・中学生を対象としたアニメーションのワークショップを複数回行った経験から、課題対象や環境に合わせて実習課題を行う方法を検討する。

#### 4:20～5:20

##### 笑いの力

阿部恒之(東北大学大学院文学研究科心理学講座)

2012年から、哲学・国文学の研究者と共に、復興の狼煙ポスタープロジェクトのポスターに写った東日本大震災の被害者の「顔」を巡って議論してきました。私は、知覚心理学的アプローチから、怒り顔と笑顔の持つ「魅力」を考えてきたのですが、今回は、笑顔のほうを中心にして、笑いの発する「力」についてお話しさせていただこうと思います。

高笑いと共に登場する黄金バット。黄門さまの何々大笑。『ワンピース』の初登場シーンで笑いながら登場する強面キャラクター。密かに笑い方の訓練を受けていたデロリンマン。笑いの力を自覚的に用いたニューヒーロー・オールマイイト・・・多くの娯楽作品における笑いを取り上げながら、笑いという感情の表出が有する異質な強さを考えてみたいと思います。

発表終了後、5:20～6:00までを質疑応答の時間に充てた。

野村・野村会員の発表はアニメーション制作において、絵を描けることを前提としない動きのアニメーションの学習の試みを紹介している。関節を動くようにした切り紙の人形を使って、どのように学生たちが歩きを再現したのかの分析とその問題点について触れた。自分たちの作った動きを学生がみて言語化する際に、ただ単に感想を書かせる方式では、なかなか問題点を意識化できないので、具体的に動きの要素的な部分を取り出してその動きについて意識化させる方法を考えていると言うことであった。例えば、足を後ろにキックするようにしないと前に進むようなアニメーションができないが、踵とつま先の関係を意識させないと、そのキックの再現が出来ないということであった。

阿部氏の報告は、表情研究を中心にしたものであるが、心理学的な詳細さに入ることなく、映像を理解するうえで、基礎的な情報を提供してくれていた。黄金バットが高笑いをあげながら登場する意味は、戦いの勝利を先取りしているのだから、すでに結果がその段階で見えているという。この指摘から連想されることは、日本の観客にとって、先取りした勝利感が、笑いによって提示され、予測通りに展開することが快感である、ということである。阿部氏は東日本大震災の被災者の日常の何気ない表情を撮影した写真家についても紹介した。そこには笑顔の持っている本質的な、心地よさが感じられた。さらに言えば、写真家の映した市井の人々の表情に普遍的なものが感じられた。

(よこた まさお/映像心理学研究会代表、日本大学文理学部)

## ドキュメンタリードラマ研究会

杉田 このみ

第3回ドキュメンタリードラマ研究会を下記のとおり開催した。

タイトル：  
ドキュメンタリードラマの最前線  
テレビマンユニオン 岸善幸氏を迎えて

日時：2018年2月18日(日) 13:30-16:50  
会場：千葉商科大学 1号館1102教室

研究会次第  
13:30 開会挨拶、研究についての進捗報告、岸氏のご紹介  
14:00 上映 (『ラジオ』90分)  
15:30 ディスカッション  
17:15 閉会

概要：  
テレビのドキュメンタリードラマ史において、テレビマンユニオンの制作した多くの番組は、重要な位置を占めている。そのなかでも、岸氏は、ドキュメンタリー制作の経験を持ち、NHK『開拓者たち』(2012)、『ラジオ』(2013)などの演出を手がけ、近年では『二重生活』(2016)『あゝ、荒野』(2017)など映画監督としても高い評価を受けている。岸氏が演出した番組『ラジオ』を鑑賞し、ディスカッション形式で、制作現場の最前線について伺い、ドキュメンタリードラマの継承と発展について議論した。

当日は、テレビマンユニオンの今野勉氏はじめ、30名ほどの参加があった。

ディスカッションでは、まず研究会メンバーから質疑し、岸氏にご回答いただき、貴重な話を伺えた(詳細については別の機会に)。会場からもいくつか質疑があり、議論が深まった。現役のテレビディレクターが自作を語る貴重な機会となり、今後このような研究会を積極的に持っていきたい。

この場を借りて、岸善幸氏と今野勉氏、上映設営、運営にご協力いただいた千葉商科大学 棚沢順教授、学生諸君に感謝申し上げます。

以上

(すぎた このみ/ドキュメンタリードラマ研究会、千葉商科大学)

## 映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

報告と計画について

昨年の11月に京都、12月に名古屋と東京で<インターリンク学生映像作品展:ISMIE (Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2017>(第11回)が開催されたことは、前の会報で報告しましたが、今後、参加19校の代表作の中から各校の推薦教員による投票によって優秀作品を選抜(「学生選抜作品集DVD」の作成)します。この選抜作品集については、今年度は発表会場の都合もあり大会での上映はできませんので、別の機会を調整しています。

なお、東部会では、現在学生選抜作品集を作成するための準備を進めています。参加各校からの許可をもって、動画共有サイトYouTubeへの作品アップロードを行い、推薦教員の互選によって数作品が5月中には選抜されます。

「ISMIE2014」「ISMIE2015」「ISMIE2016」と検索していただければ、以前の参加作品もご覧頂けますので、お時間の許す範囲でご覧ください。映像制作の新たな状況が垣間見えると思います。

また、今年度も「ISMIE 2018」(第12回)を計画しており、京都会場は以下の予定です。名古屋会場、東京会場、その他でも調整を進めています。

<京都会場(予定)>  
「KINO-VISION 2018」のプログラムとして実施(研究会を含む)  
日程 2018年11月16(金)~18(日)  
会場 Lumen Gallery(京都・魅屋町五条)

最後に、前号にて予告しました公開ディスカッションの報告は、運営側の都合で次号に掲載いたしません。申し訳ありません。

以上

(いな しんすけ/映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)  
(おくのくにとし/映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

## 写真研究会

前川 修

去る3月20日(火曜日)、第一回目の写真研究会を開催いたしました。

昨年の準備大会(第0回)と同じく、同志社女子大学を会場にしました。

参加者は20名強。ともかく濃密な研究会になりました。報告者とタイトルは以下の通りです。

.....

報告1 箱かほる氏(神戸大学人文学研究科博士前期課程)

「内なる他者の身体表象——鳥居龍蔵の千島アイヌ調査写真をめぐって」

報告2 笠間悠貴会員(明治大学理工学研究科博士後期課程)

「さかさ双眼鏡と蜃気楼——渡辺兼人の80年代初期作品と風景論を辿る」

.....

箱氏の発表は鳥居龍蔵の千島アイヌ写真、笠間会員の発表は渡辺兼人の都市写真をめぐってのもの、一方が「内なる他者」を同化/差異化する機能を帯びた局所化する記録写真、他方が無人の、局所化不可能な「芸術的」な風景写真という、対極的な写真を素材にした報告で、写真というメディアを研究する意味が少なからずあぶりだせるような回となりました。参加者からは多くの意見もあり、活発な議論のやりとりもあり、今後の活動への契機も多々見いだせたと思います。

次回の研究会は秋に東京での開催を予定しています(毎年2回春秋の開催(東京/京都の交互開催))。全国の写真研究をされている若い研究者の方々の発表申込を随時募集しております。条件は以下の通りです。

発表時間:45分程度。

発表内容:写真に関する研究発表であれば、申込資格があります。

(学会員であるか否かは問いませんが、日本映像学会への入会をお勧めします。)

(発表の可否については、運営構成委員等で検討のうえ連絡させていただきます。)

申込方法:要旨(A4一枚程度)を添付して代表者(前川:bqv06466@gmail.com)に発表希望メールをお送りください。上記の発表の可否および開催時期の調整など、折り返し連絡させていただきます。

(まえかわ おさむ/写真研究会代表、神戸大学人文学研究科)

## 映像教育研究会

佐藤 元状

映像教育研究会では、5月と6月に下記の二つのイベントを予定しています。

1 「ソーシャル・メディアとトランスメディア・ナラティブ フィリップ・ゴチエ氏講演会」。明治学院大学言語文化研究所・日本映像学会映像教育研究会共催。

日時：2018年5月25日 18:00～20:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館1351教室（定員52名）

以下のURLを参考にさせていただきます。

<https://www.meijigakuin.ac.jp/campus/shirokane/>

<https://www.meijigakuin.ac.jp/access/>

鋭敏の若手メディア研究者フィリップ・ゴチエ氏による英語の講演です。通訳有り。予約は不要ですので、どうぞ直接会場へお越しください。無料です。

2 「情熱的なアジェンダ 吉村公三郎と増村保造におけるメロドラマ アール・ジャクソン教授講演会」(“Passionate Agendas: Melodrama in Yoshimura Kozaburo and Masumura Yasuzo”)。日本映像学会映像教育研究会主催。慶應義塾大学教養研究センター後援。

日時：2018年6月30日 16:00～18:30

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

以下のURLを参考にさせていただきます。

<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/hiyoshi.html>

現在、National Chiao Tung University (台湾) で教鞭をとられている日本映画研究の大家による英語での講演です。通訳有り。予約は不要です。渋谷より電車で20分、駅近のキャンパスです。どうぞご参加下さい。無料です。

また7月以降に研究会員による連続イベントを準備中です。「メディアの固有性」および「アダプテーションの教育」をシリーズ化していきます。

以上

(さとう もとのり／映像教育研究会代表、慶應義塾大学)

## メディアアート研究会

関口 敦仁

メディアアート研究会は29年度より具体的な活動を開始し、研究会研究発表を一回、企画展覧会を一回開催した。報告は前号会報第181号に掲載した。平成30年度は同様に、1～2回のメディアアート研究会の開催、1回のメディアアート研究会企画展示を予定している。

## 平成30年度活動計画

メディアアート研究会企画展示に関してはメディアアートと認知研究を利用した表現や人間の活動を表現とした研究や作品を企画し、「人間表現とメディアアート」(仮題)を開催する。

当初平成30年度研究会企画展示概要としては「バイオアートの現在」として、バイオアート関連の作品研究の展示を予定していたが、展示予定の愛知県立芸術大学芸術資料館が美術館に準ずるために、土や、なまもの、生き物、植物などが展示できないことが、改めて示されて、想定していた多くの展示ができないことがはっきりしたために予定を変更した。

展示作者については企画中。展示希望についても受け付けている。展覧会場については県立芸術資料館またはあいち・アート・ラボを検討中。展示では映像表現の広がりとしてドキュメンテーション映像、シミュレーション映像の新たな扱いについて検討する機会を設ける。研究会については、メディアアートの新たな表現についての研究を進めていく。

研究会会場は愛知県立芸術大学を予定している。それぞれの開催時期は9月、10月を予定している。

以上

(せきぐち あつひと／メディアアート研究会代表、愛知県立芸術大学)

## ショートフィルム研究会

林 緑子

2017年度、ショートフィルム研究会として、下記2件を開催しました。

## 第22回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video: exhibition 2018」

展示上映

期日 展示上映：2018年1月18日(木)-1月21日(日)

13:00-19:00

トーク：2018年1月19日(金) 19時-ゲスト・松田るみ

交流会：2018年1月19日(金) 19:00-

内容 展示(映像作品12点)、トーク、交流会

会場 EUスタジオ(愛知県名古屋市中区葵1-15-16 The Office 葵2F B1)

来場者数 45名

企画 伊藤仁美

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

協力 EUスタジオ(名古屋市東区葵1-15-13 The Office 葵2F B1)

日本映像学会研究活動助成金対象研究

公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

## 上映作品

『夜を飛ぶ』03'00" (2015) さとうゆか

『pm4:28』04'54" (2014) 所通菜

『ニニ』05'16" (2014) 南條沙歩

『残響』03'32" (2010) 河村るみ

『FM』09'34" (2017) 伊藤仁美

『Mandala』05'00" (2017) 山口諒

『ぼんぼこマウンテン』10'00" (2016) 吉田孝行

『Trace my destiny』10'07" (2018) 前川宗睦

『婚カツ合戦わちゃちゃの日常』12'00" (2016) 笠原明枝

『わたしと傘の』01'30" (2018) 高橋佑果

『偽物のあなたのための』05'05" (2017) 大内りえ子

『テレビの前のみんな』03'48" (2017) 棚屋絵里依

今回は映像上映の展覧会として、公募で作品を募りました。東海地方だけではなく様々な地方から作品が集まり、交流会では作家と鑑賞者の交流会のみならず、現在活動している作家と学生との交流も見られました。また、名古屋と関東で活躍されている作家さんに近作について、プレゼンテーション形式でお話いただきました。その後ディスカッションにて、制作の背景などをお聞きしました。場所を持っているオーナーと作家が意見を交わす光景があり、新しい意見をもらう機会ともなりました。(報告：伊藤仁美)

## 第23回活動

会期名 黒坂圭太 - 不定形のドローイング 映像作品「不定形シリーズ」をめぐるとの対話

期日 2018年2月18日(日) 14:00-17:30

講演者 黒坂圭太(アニメーション作家)、赤塚若樹(首都大学東京 教授)

内容 ライブ・ドローイング、上映、講演、交流会

会場 シアターカフェ

(〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須二丁目32-24 マエノビル2階)

来場者数 14名

入場無料

企画 林緑子

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

日本映像学会研究活動助成金対象研究

## 上映作品

『変形作品第2番』(1984年/抜粋、8分)

『輪郭』(2012年/7分)

『陽気な風景たち』(2015年/25分)

『山川景子は振り向かない』(2017年/10分)

今回は、作家・黒坂圭太氏の映像作品「不定形シリーズ」を中心に、その制作の変遷を、研究者・赤塚若樹氏との対談によりひも解く内容となった。進行は、黒坂氏のライブ・ドローイングの後、作品上映と対談を交互に行った。

ライブ・ドローイングは、一冊のクロッキー帳を、即興による線画で埋めていくものだった。サイズの小さな冊子状の紙にライブドローイングするのは、黒坂氏にとっては初の試みで、今後の制作のアイデアとして実験の場となったとのこと。今回の不定形シリーズにも通じる、抽象的な中に時折具象的とも取れるモチーフが混在した作品となった。上映と対談は、各作品の制作当時の社会的状況や作家の心境、音楽・音との関係性などについて、制作スタイルの変遷を概観しつつ紹介された。楽譜のような構造化された絵コンテも紹介された。システムチックで構造化された要素と、即興的で不確定な要素が同居した表象の制作スタイルで、抽象と具象の間に位置するアニメーション作品を生み出していた。作品上映と作家 - 研究者の対談を通じることで、こうした抽象的な映像作品について、より理解が深まった。

以上

(はやし みどりこ／ショートフィルム研究会代表)

Image Arts and Sciences 182 (2018) , 13

支部・研究会だより  
中部支部

伏木 啓

◎報告

中部支部では、2017年度第3回研究会を下記の通り開催しました。

2017年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第3回研究会  
日時：2018年03月05日(月) 13:30より  
会場：名古屋学芸大学 メディア造形学部棟 MCB210 教室

◎スケジュール

- 13:30 ~ 13:35 開催校挨拶
- 13:35 ~ 14:00 研究発表：梶川 瑛里 氏 | 重力と落下——『くもとちゅうりっぷ』の空間表象と運動表現
- 14:05 ~ 14:25 研究発表：村上 将城 会員 | 作品『landschaft』について
- 14:45 ~ 18:20 頃 学生作品プレゼンテーション
- 18:30 頃より 学内にて懇親会

◎研究発表

重力と落下——『くもとちゅうりっぷ』の空間表象と運動表現  
梶川 瑛里 氏 (名古屋大学大学院 文学研究科 博士課程前期課程)  
要旨：

1943年に製作された日本アニメーションの金字塔と言われる『くもとちゅうりっぷ』の受容には、相反する二つの意見が見られる。一方で、戦時下の状況にも関わらずアニメーションの美的表現、詩情性を突き詰めたと称賛されるが、他方近年の研究では、そのキャラクター表象が戦時下のイデオロギーに基づいていると指摘される。いずれにしても、このアニメーション作品の中で、空間や身体という物理的側面からどのような意味が構築されているのかという問題は軽んじられてきた。しかし、『くもとちゅうりっぷ』に見られる物理的な空間や身体は、戦前および戦時下のアニメーション文化を色濃く映し出しているのみならず、戦後日本のアニメーションにも継承される表現技法と技術を示している点で、極めて重要なものである。

本発表では、『くもとちゅうりっぷ』を題材として、そのリアリズム的表現に注目すると同時に、アニメーションにおける重力という空間表象や落下運動の分析を行う。ディズニーやジブリのアニメーション作品との比較も交えながら、『くもとちゅうりっぷ』の日本アニメーション史上における意義を空間表象と運動表現の側面から捉え直していく。

作品「landschaft」について

村上 将城 会員 (名古屋学芸大学 映像メディア学科 専任講師)  
要旨：

2006年より継続して写真作品「landschaft」を制作している。風景という言葉だけでは回収することのできない、人間の視覚によってとらえられる目の前の認識像 landschaft / 景観を写真で遺し、記録していく本作品を、これまでに制作したシリーズを踏まえて解説する。



◎学生作品プレゼンテーション (発表順)

●愛知県立芸術大学

空想地図「ChaosFantasia」 | Web コンテンツ  
長井 惇之介 (デザイン工芸科 デザイン専攻 4年)

●名古屋芸術大学

アイデンティティ・Identity・我們的存在 | 映画 | 5m30s  
(本編: 40m)

施 亜希子 (デザイン学科メディアデザインコース 4年)

Blooming | アニメーション | 7m (本編: 14m)

佐原 由菜 (デザイン学科メディアデザインコース 4年)

●名古屋文理大学

workout in the summer | 映像作品 | 3m3s

笹井 昭慶 (情報メディア学科 2年)

●相山女学園大学



鉛鉛 (あめあめ) ふれふれ | インタラクティブ・プログラム

FES やで | インタラクティブ・プログラム

大崎 彩花 (文化情報学部メディア情報学科 3年生)

械獣の住む街 | アニメーション | 52s

非常口 | アニメーション | 30s

わたしと傘の | アニメーション | 1m45s

高橋 佑果 (文化情報学部メディア情報学科 3年生)

●名古屋造形大学

暮れるトマトと朝日 | 映画 | 5 ~ 10m (本編: 43m30s)

佐藤 佑一 + 山田 理奈 + 城山 紗織 (デジタルメディアデザインコース 4年)

●情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

「私的映画の現在 物語を撮る / 観ること」

me myself & us | シングルチャンネル作品 | 10m (本編: 75m)

高坂 聖太郎 (メディア表現研究科 2年)

「時間軸を持つマンガ表現の研究」

パラサイトカラコン | シングルチャンネル上映 (壁面ディスプレイ展示) | 2m

女毛 | シングルチャンネル上映 (壁面ディスプレイ展示) | 2m

尾焼津 早織 (メディア表現研究科 1年)

●愛知淑徳大学

「PICTIP # え、ここ浜松なの？」

- 写真を切り口とした浜松市の新たな魅力を伝える冊子の制作 - | フリーペーパー A5 サイズ 32 ページ

三岡 里穂 (メディアプロデュース学部 メディアコミュニケーション専修 4年)

●名古屋学芸大学

update | 写真

樋口 誠也 (映像メディア学科 フォト領域 4年)

げつまつのしゅーまつ | アニメーション | 8m18s

増田 優太 (映像メディア学科 アニメーション領域 3年)

私は追う | 写真 (平面展示、製本)

清水 邑有 (映像メディア学科 フォト領域 4年)

「既視感を誘発する試み」

月と檸檬 | インスタレーション

十二月の蛇 | インスタレーション

サンタは窓からやってくる | インスタレーション

岩井 春華 (映像メディア学科 インスタレーション領域 4年)

以上

(ふしき けい / 中部支部担当常任理事、名古屋学芸大学)

フォーラム

■日本学術振興会育志賞受賞候補者推薦募集

<https://www.jpsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>

第9回「日本学術振興会育志賞」受賞候補者推薦要項 (平成30年度)

1. 趣旨

日本学術振興会(以下「本会」という)は、天皇陛下の御即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として、平成21年に陛下から御下賜金を賜りました。

このような陛下のお気持ちを承けて、本会では、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することで、その勉学及び研究意欲を高め、若手研究者の養成を図ることを目的として、平成22年度に「日本学術振興会育志賞」を創設しました。

2. 対象分野

人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野

3. 授賞

授賞数は16名程度とし、受賞者には、賞状、賞牌及び副賞として学業奨励金110万円を贈呈します。

4. 対象者

以下の①②の条件を満たす者を対象としますが、推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者、経済的に困難な状況や研究施設が必ずしも十分ではない等の厳しい研究環境の下でも創意工夫を凝らして主体的に研究を進めている者など多様な観点から推薦願います。

① 我が国の大学院博士課程学生であって、平成30年4月1日において34歳未満の者で、平成30年5月1日において次の1)から4)のいずれかに該当する者

- 1) 区分制の博士後期課程に在学する者
- 2) 一貫制の博士課程3年次以上の年次に在学する者
- 3) 後期3年みの博士課程に在学する者
- 4) 医学、歯学、薬学又は獣医学系の4年制博士課程に在学する者

② 大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる者  
※海外からの留学生で上記の条件を満たす者も対象にしています。

5. 推薦権者

- 1) 我が国の大学の長(大学長推薦)  
推薦数: 人文学、理工系、生物系各1名、その他に分野を問わず1名の計4名まで
- 2) 我が国の学術団体の長(学会長推薦)  
推薦数: 1名まで  
※学術団体については、日本学術会議協力学術研究団体となっている学術団体に限り、  
※自薦・個人推薦は受け付けません。

6. 応募方法

電子申請システムにより推薦を受け付けます。(紙媒体での応募は受け付けません。)  
様式1、様式2(1ページ目)は電子申請システムでダウンロードしたものを使用してください。それ以外の様式等は、本会のホームページ(<https://www.jpsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>)よりダウンロードしてください。

電子申請システム用のID、パスワードは、紙媒体にてご案内します。(3月中旬発送予定。)3月下旬になっても受領できない場合は、ご連絡ください。

電子申請システム URL  
<https://area18.smp.ne.jp/area/p/Ldt9lapdt9mflik0/5HnrFe/login.html>  
操作マニュアル URL  
<https://www.jpsps.go.jp/j-ikushi-prize/data/densimanual.pdf>

書類の作成にあたっては、本会のホームページに掲載している「提出書類の記入要領」を参照してください。

7. 受付期間

平成30年6月4日(月)～6月8日(金) 17:00(締切)  
※電子申請システムは、平成30年3月16日(金)から使用可能

8. 選考方法

推薦のあった候補者について、日本学術振興会に設置する選考委員会において、書類選考により面接選考対象者を決定し、面接選考を経て受賞者を決定します。

9. 選考基準

学業成績が優秀で、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいること。選考に当たっては、本賞の趣旨に鑑み、次の①から③を重視します。

- ① 我が国の学術研究の将来を担う研究者となりうる卓越した能力を有しており、将来学界等への貢献が期待されること
- ② 将来、更なる研究の発展が見込まれ、卓越した研究者に成長していく可能性を有していること
- ③ 経済的に困難な状況や、研究施設が必ずしも十分ではない等の厳しい研究環境の下でも創意工夫を凝らして、主体的に研究を進めていること  
<上記に該当する者の例>
  - 発想・着想、課題設定などにおいて、創造性・独創性が高い研究に主体的に取り組んでいる者
  - 当該学問領域や学際領域における重要な基盤となる研究に主体的に取り組んでいる者
  - 研究活動に関連する、ユニークな活動に主体的に取り組んでいる者
  - 短期的には論文等の成果が出にくい研究に対して、忍耐強く取り組んでいる者

10. 選考結果の通知

選考結果は、平成31年1月頃推薦者に通知する予定です。



編集後記

総務委員会

■会報第182号をお届けいたします。各支部や研究会で充実した企画が実施されています。参加できなかった会員にとって、これらの具体的な報告は大変参考になる重要なものです。各執筆の方々へ改めてお礼を申し上げます。今回の「展望」では、物語映画論や認知主義的な映画研究に精通する木下耕介先生に、映画・映像のみならず、コンピューターゲームや演劇なども含めた「物語叙述」に関する総合的研究の可能性を提示していただきました。さらなる議論の展開が期待されます。(板倉)

日本映像学会第44回大会  
実行委員会よりのメッセージ

大会実行委員長 李 容旭

2018年5月26日(土)及び27日(日)、東京工芸大学中野キャンパスにおいて、第44回大会が開催されます。

研究発表及び作品発表の申込は、2月23日(金)で締め切らせていただきました。第2通信に同封した申込ハガキにおいて、大会参加申込と大会研究発表・作品発表申込のめくり日が入れ違っていて印刷されていたことを、改めてお詫びいたします。大会参加の申込ハガキをまだ投函されていない会員の方は、後送した往復ハガキをご使用下さい。

実行委員会の手許に到着したエントリーは、研究発表61件、作品発表15件という、記録的な数になりました。3月17日(土)に開催された研究企画委員会及び理事会において、発表概要を厳正に審査し、その結果を各会員に通知しています。その後、数件の辞退と発表カテゴリーの変更などの申出が寄せられ、現在プログラム作成の最終段階に入るとしています。

第1日目は、研究発表2セッションに加え、昨年亡くなった松本俊夫元会長の業績を再評価するシンポジウム「越境する映像」(サブ・タイトル未定)、そして懇親会。第2日目は、研究発表・作品発表及び総会の予定です。

会員の皆様のふるってのご参加を、心よりお待ちしております。

日本映像学会第44回大会実行委員会ホームページ

<https://eizo2018.jimdo.com/>

11. 授賞式

平成31年3月頃に行う予定です。詳細については、選考結果とともに受賞者に通知します。  
なお、受賞者の授賞式に出席する旅費は本会が負担します。

12. 受賞後の取扱い

受賞者は、希望により所定の申請手続きを経て受賞の翌年度から特別研究員等に採用され、研究奨励金等が支給されます。採用は、翌年度の4月1日の在学年次、学位の取得状況等に応じた採用区分の特別研究員又は外国人特別研究員となります。既に特別研究員として採用されている受賞者についても、希望により前記と同様の扱いを受けることが可能です。詳細については、受賞者に対して別途お知らせします。

なお、特別研究員又は外国人特別研究員への採用に当たっては、原則として他のフェローシップ、研究費の助成等を受給することはできません。また、定められた規則等を遵守していただきます。詳細は、当該事業募集要項・採用後の諸手続きの手引き等をご確認ください。

(特別研究員: <https://www.jpsps.go.jp/j-pd/index.html>,  
外国人特別研究員: <https://www.jpsps.go.jp/j-fellow/index.html>)

13. その他

- 1) 推薦書(様式2)の「推薦理由」欄は、大学長又は学会長それぞれ独自の観点で記載してください。
- 2) 推薦書等の提出後、その記載事項を変更又は補充することはできません。
- 3) 提出された推薦書等は返却しません。
- 4) 選考結果に対する問い合わせには応じかねます。
- 5) 受賞者の氏名、所属等は公表されるのであらかじめ承知願います。
- 6) 受賞者には、我が国の学術の振興、本会の事業の充実等のため、協力を依頼することがありますので、あらかじめ承知願います。
- 7) 受賞者には、育志賞研究発表会があり、受賞者間のネットワークづくりの機会となっています。
- 8) 推薦書類に含まれる個人情報については、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」及び本会の「個人情報保護規程」に基づき厳重に管理し、本事業や関連する本会の業務遂行のために利用します。

14. 問い合わせ先

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-3-1  
独立行政法人 日本学術振興会  
人材育成事業部 研究者養成課「日本学術振興会 育志賞」担当  
TEL 03-3263-0912 FAX 03-3222-1986  
ホームページアドレス  
<https://www.jpsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html>

以上